

野獣な獣医

「『慎重に選考を重ねました結果、まことに残念ながら今回は採用を見送らせていただくことになりました』……か……」

不採用の通知メールをもらうのは、これで何回目になるだろうか。大学の学生寮に住む小向沙良は、入り口の靴箱の前でため息をついた。自室に入り、ワンルームの照明を点けてリクルートスーツから普段着に着替える。

「あ〜！ どこでもいいから就職したい！」

あと十日もせずに、三月が終わる。敷地内にある桜は、もう花開く時期を迎えていた。予定では、もうとつくにここを出て、新社会人として新しい一步を踏み出す準備をしていたはずなのに。

「どうしてこんなふうになっちゃったかな……」

すでに、どうしても生活に必要なもの以外は段ボールに詰め、部屋の隅すみに積んである。だけど、その行き先はいまだに決まっていない。このままでは、大学卒業と同時に無職の上に宿なしになってしまう。

現在大学四年生の沙良は、去年の終わりごろ、都内事務機器メーカーから内定をもらった。しかし二月になってすぐに人事部から連絡が入り「会社が倒産する」と告げられてしまったのだ。まさに青天の霹靂。

沙良はその日から再度リクルートスーツを引っ張り出し、就活を再開するはめになった。しかし、いくら努力しても「採用」の二文字をもらえない。なんといっても、もう二月だ。すでに企業の新卒枠は埋まっている。そんなわけで、二度目の就活は空振りが続いていた。「やっぱり面接がネックなんだろうなあ……」

沙良は昔から、小心者の上に結構な人見知りだった。ビビリだし、おまけにあがり症でもある。そんな沙良だけど、人と話すときはなるべく目を見て話すように心がけてはいた。最悪視線をそらしても、顔はそむけないようにする、と。

それは、沙良が自分なりに決めたルールだった。

自分の弱い性格から逃げることなく、正面から向き合い、少しずつでもいいから改善していきたくない。そう思って頑張ってきた。しかし、そんな努力も空しく、今のところまったく効果は出ていない。むしろこのルールのせいで、余計緊張するという悪循環に陥っている気さえする。

当然、就活をする上でもっとも苦手なのは面接だ。

あらゆるおまじないを試しても、なんの効果も得られない。面接の回数だけは重ねているけれど、慣れることなく毎回同じように緊張する。

「あゝあ……。あのときはラッキーだったもんなあ……」

倒産したとはいえ、内定をもらったのは割と名の知れた会社だった。そこから採用の通知をゲットできたのは、面接担当の人事部長がどことなく実家にいるヤギに似ていたおかげだった。

沙良の実家は、父方の祖父の代から小さな牧場を営んでいる。そのため、牛や馬などの家畜には、生まれたときから慣れ親しんでいるのだ。

（あの面接官は、ヤギ……。ヤギだから緊張しなくてもいい……）

沙良は全神経を面接官の顔に集中させ、彼をヤギだと思い込んだ。

それが功を奏したのか、沙良は比較的落ち着いた受け答えをすることに成功し、無事内定をもらえたというわけだった。

それなのに状況は一変し、いまや就職浪人を目前にした崖っぷち状態だ。

沙良の内定取り消しを知った両親は、なにを思ったのか突然見合い写真を送りつけてきた。

大学卒業して、すぐに見合い結婚!?

冗談じゃない！ まだまともな恋愛ひとつしたことがないのに、見合いで結婚なんてあまりにも夢がなさすぎる。

「必ず就職先を見つけるから、お見合いだけは勘弁して！」

そう言い張ることで、どうにかお見合いそのものは回避できた。だけど現実は厳しく、いまだ受け入れてくれる会社が見つからない。このままでは両親の希望通り、一度実家に帰らざるを得なくなってしまう。帰郷すれば、たぶん二度と都会には戻れないだろう。

「ぜったい帰らない。せめてあと五年……。ううん、三年でもいい。そしてできれば、素敵な恋愛

なんかもしてみたい……」

沙良は大学進学を機に地元である北関東を離れ、東京で一人暮らしをはじめた。

だが、東京に出てからも、ずっと寮生活だ。彼氏と同棲、なんて展開にはまったくなっていない。いや、同棲どころか、彼氏すらできなかったことがない。なにしろ、二十二歳になった今でも、なぜか年相応の色気というものが無いのだ。友人からフェロモンがないと言われていたが、きつとそれは正解なのだろう。

そのうえ、実は初対面の男性が苦手で、ついつい避けるように生活してしまっている。

だが、親にお見合いを勧められると、さすがにこのままではまずいのではないかと思えてくる。

「はあ……。就活も恋もうまくいかないなあ。ここ、月末には退去しなきゃいけないのに……」

このままだと職なし宿なしプラス彼氏なし、という悲惨な状況に陥ってしまう。

「それだけは絶対にダメ。だって私には大事なリクちゃんがいるもの」

沙良は窓際に置かれたガラスケージを見た。そこには、甲羅の長さが二十センチほどのヘルマンリクガメの「リクちゃん」がいる。

リクちゃんは、沙良が小学校五年生のときから飼っている大切な同居人だ。今年の春で十二歳になる男の子である。ドーム型の甲羅とつぶらな瞳がチャームポイントで、ペットというより、沙良にとってはおもちゃ家族同然の存在だ。

「天気もいいし、気分転換にちよっと散歩でも行こうか」

沙良が話しかけると、リクちゃんは首を伸ばして歓迎の意を示した。

近所の河原には、カメが散歩するのに最適な草地がある。

沙良はいつものように散歩用のバスケットを用意し、ケージからリクちゃんを取り出した。バスケットの底は、丸く平らになっており、リクちゃんを入れるのにちょうどいい広さだ。なかにお気に入りのタオルを敷いていると、小さなくしゃみが聞こえてきた。

「あれ？ リクちゃん、風邪でも引いたの？」

近づいて顔を見ると、口の周りが少し濡れている。エサもあまり食べていない様子だ。

これまでも何度か風邪を引いたことはあるけれど、これほど食欲が落ちたことはなかった。

口を開けたときになかを覗き見ると、なんだか少し腫れている。

明らかに普段とは違う。

にわかに不安になった沙良は、近所の動物病院に電話をした。そこは以前から定期健診でお世話になっているところで、爬虫類の専門医も常駐している。しかし今日は、肝心の専門医が急遽入院して不在だという。困った沙良は電話で対応してくれた女性スタッフに、カメを診てくれるおすすめの病院をたずねた。

『竹藪の藪に原っぱの原。そこ、開院してまだ二年ちよつとなんだけど、カメはもちろんエキゾチックアニマル全般を診てくれる、腕のいい獣医師がいるって評判なのよ』

エキゾチックアニマルとは、犬や猫以外のペットで、外国産の動物とか、珍しい動物の総称のようにも使われる表現だ。

「藪原アニマルクリニックですね？ わかりました。ありがとうございます」

通話を終わると、沙良はメモ書きしたクリニックスの住所を確認した。そこは学生寮から十キロ弱離れた場所にあり、電車だとやたらと乗り換えが多い。リクちゃんの負担も考えると、行くならタクシーが一番速くて便利だ。

クリニックスに電話すると、すぐに連れてくるようにと言われた。基本的に午後は予約制らしいが、特別に診てくれるそうだ。

「リクちゃん、待っててね。病院に連れて行ってあげるから」

沙良は急いでクローゼットを開け、棚の上の空缶に手を伸ばした。なかには、臨時の出費用に取り置いている現金が入っている。万札を取り出し、沙良はリクちゃんを連れて大通りまで走った。ちようどやってきたタクシーを止め、ドライバーにクリニックスの住所を言う。

およそ十五分かけてクリニックスに到着したときには、午後五時を少しすぎていた。

降り立った先にある三階建ての建物には、英字プレートでクリニックスの名前が書かれている。おしゃれな外観にちよつとばかり気後れしながらも、入り口の自動ドアを通り抜けて受付に向かった。

「あの、先ほどお電話させていただいた小向ですが――」

「ああ、ヘルマンリクガメのリクちゃんですね。承っていますよ」

受付の女性がにこやかに対応する。細身でショートヘアのその人は、五十歳くらいだろうか。化粧つけない素肌美人で、なんとなく雰囲気を実家の母親に似ている。そのおかげで、いくらか気持ちが悪く落ち着いた。

「はい、じゃあこれを書いてそちらで待っていてくださいね」

問診票のはさまったバインダーを受け取り、奥の待合室に向かった。建物のなかは白で統一されており、とても清潔感がある。

椅子に座り、ひとまずほつとしてリクちゃんが入ったバスケットのなかを覗いた。急な移動にもかかわらず、リクちゃんはお気に入りのタオルに包まってじっとしてくれている。

待合室には、三人の女性が、それぞれのペットを連れて座っていた。

沙良が顔を上げるなり、全員の視線が集まった。なかにはあからさまに睨んでくる人もいて、居心地が悪い。

（もしかして、私のせいで診療時間がズレ込んだりするのかな？）

申し訳なく思い、軽く会釈してみただけれど、見事にスルーされた。

三人は皆ばつちりメイクで、着ているものもおしゃれだ。連れている患畜も、それなりにお高い品種の犬や猫ばかり。沙良のように普段着で駆け込んできた者など、一人もない様子だ。

（なんか怖い……。いつも行っている動物病院とはぜんぜん雰囲気が違う）

近所の動物病院は、初老の獣医師夫婦が経営する庶民的なところだ。やって来る飼い主も皆普段着で、おしゃれしてくる人など一人もない。

「ふんっ」

問診票を書いていると、正面から鼻を鳴らす音が聞こえてきた。ちらりと目線だけ上げると、脚を組んだハイヒールの女性が、沙良をまっすぐに見ている。

（えっ？ もしかして私に対して？）

どうしてそんなことをされるのだろう。理由もわからないまま、沙良は肩を縮こまらせて下を向き、問診票の記載を続けた。

ほどなく問診票を書き終え、顔を上げる。待合室の奥にドアが三つ並んでいて、左から順に「A」「B」「C」の文字がはめ込まれているのが見えた。

そのまましばらく待っていると「A」のドアから受付とは別の女性スタッフが顔を出した。

「小向リクちゃん、なかにどうぞ」

招かれて入ると、白衣を着た男性が机の前に座っていた。後ろ姿の背中がとても広い。

これなら、大型の患者でも難なく扱うことができるだろう――

そんなことを思いながら奥へ進み、椅子に座る。すると、書きものをして指が止まり、背もたれつきの椅子がぐるりと回った。

「ああ、こんにちは。はじめましての飼い主さんですね」

身体ごと振り向いた男性の顔を見て、沙良は思わず息を呑んだ。

彼は、モデルか映画俳優並みにかつこよかったのだ。

目鼻立ちは完璧に整っていて、浮かんでいる笑みもとてもなく魅力的。

「こつ、こ、こんにちは。よろしくお願いします」

突然のイケメン登場に、出だしから躓いてしまう。

（うわぁ、もう、ニワトリのモノマネじゃあるまいし――）

またやつてしまった。

緊張するまいと心がけているのに、初対面の男性に対しては、だいたいこんな感じになる。やたらと緊張するし、それが相手にも伝わったような気がして、さらに萎縮するのだ。

しかも、今回は特にその状態が激しい。目の前のイケメンがハイレベルすぎるせいだろう。

「はい、こちらこそよろしくお願いします。小向リクちゃん。和田山アニマル病院からのご紹介ですね。先ほど和田山先生から電話をいただきました。僕が責任を持って診ますからご心配なく」

「はい……」

沙良はべこりと頭を下げ、ぎこちなく顔を上げる。

白衣の胸元にあるネームプレートには「獣医師 藪原亮也」と文字が刻まれている。

（えっ……、つてことは、この人が院長先生なの？）

なぜか勝手に、年齢の男性獣医師を想像していた。思わず顔を見してしまう。すると、彼とぼつちり目が合った。

その目力が、ハンパなくすごい。

瞳孔を囲む虹彩の色は、沙良がこれまで見たこともないほど印象的な茶褐色だった。それだけでもずさまじいインパクトがある。

もしかして、先祖に外国の人がいたりするのだろうか。

いずれにせよ、これほどのイケメンを目の当たりにしたのは生まれてはじめてのことだ。

（やだやだ、聞いてないよ、こんなイケメンの先生だとか！）

心のなかで思いっきりビビる。

普段生活する上で、一人のときは極力男性を避ける傾向にある沙良だ。

病院や行きつけの美容院はもちろん、スパーのレジに並ぶときでさえも、できるだけ女性を選んでいる。それなのに、いきなりこんなハイレベルの男性が目の前に現れてしまった。いったいどんな顔をすればいいのだろう。

そんな沙良の緊張をよそに、亮也が視線を合わせてにつこりと微笑んでくる。一気に頬が熱くなり、耳朶じだが痛いほど火照りほてだした。

目をそらそうとするのに、なぜかできない。

結果的に、しばらくの間じっと見つめ合う状態が続いた。ようやく、亮也のほうから目をそらし、沙良は解放される。

「ヘルマンリクガメを診るのは久しぶりだなあ。結構人気なのに、ここではあまり見かけなくて。

リクちゃんはペットショップで？」

「はい、そうです」

「最初からヘルマンリクガメ限定で探してたの？」

「いいえ、そうじゃなかったんですけど……」

「もしかして、その場でひと目惚れしたとか？」

「はい、そうなんです」

「なるほどね」

机に向き直った亮也と、そんな雑談を交かわす。

イケメンな上に気さくな性格なんて、待合室に美女が並ぶはずだ。カルテにペンを走らせる亮也を見ながら、沙良はそっと頷く。

それにしても落ち着かない。

緊張をほぐそうと話しかけてくれているのはわかるが、イケメン度が高すぎて心臓に悪いのだ。

正直目のやり場に困るし、できることなら今すぐに帰りたい。

「さて、と。では、診察しましょう」

再び顔を上げた亮也の視線が、しっかりと沙良を捕とらえる。またしても目をそらせなくなり、二人の視線ががっちりとからみ合った。

なんだろう、この強いオーラは。

一瞬、捕食者に捕とわれた獲物のような気持ちになる。

なのに、なぜか感じるのには絶対的な恐怖ではなく、包み込まれるような安心感で――

「は〜い、リクちゃん。じゃあ台の上に乗りましょうか〜」

女性スタッフが二人の間に割って入り、バスケットからリクちゃんを取り出した。そして診察台の上に乗せる。

知らない場所に警戒しているのか、リクちゃんが首をもたげてあたりを見回した。

「よろしく、リクちゃん。ちょっと診みさせてもらおうよ」

亮也はリクちゃんに顔を近づけ、丁寧に診察をはじめた。

彼の目に、一段と真剣な色が浮かぶ。

亮也に見つめられた途端、リクちゃんがぴたりと動きを止めて、亮也を見つめ返した。亮也が口を開けると、リクちゃんも同じように口を開ける。口腔内を診察されている間も、リクちゃんはおとなしく口を開けたままじっとしていた。

一方、そばで見ている沙良は、いつの間にか口を半開きにして治療風景に見入っていた。(なんだかすごい……。まるで催眠術にかかっているみたい)

「大丈夫よ。うちの先生、カメの病気にも詳しいから」

沙良の驚いた様子に気づいたのか、女性スタッフが横に立って話しかけてきた。胸元には「看護師 中村」というネームプレートがついている。

「うちの息子もイシガメを飼っていてね。名前を『ガメラ』って言うんだけど、何度かここでお世話になっているのよ。カメって本当に可愛いわよね」

間延びした中村の口調に、いくぶん緊張が解ける。そんな頃合を見計らったように、亮也が顔を上げて沙良のほうを見た。

「リクちゃんの食欲がなくなったのはいつからかな？」

低く響く優しい声。

いくぶん上目遣いになった彼の視線が、またしても沙良を射貫く。けれど口調が少し砕けた感じになったせいか、さつきよりも親しみを感じた。

「えっと……夕べは普通に食べていました。でも、さつき外出先から帰って見てみたら、あげたエサがちよっとしか減っていなくて……」

「エサはふだん、なにを主にあげてるの？」

「青菜全般で、特にモロヘイヤや小松菜とかが多いです」

「リクちゃんの好きなものは？」

「バナナとイチゴです。あ、あとプチトマトはコロコロして遊びながら食べるのが好きなので、あえて丸ごとあげています。それをスマホで録画して見せてあげると――、あ、すみません。余計なことしゃべっちゃって……」

リクちゃんのこととなると、つい聞かれてもいないことまでしゃべってしまう。一度合コンでこれをやってドン引きされたことを思い出して、沙良は肩をすくめた。

「いや、関係なくはないよ。食欲がなくて少しだけでも食べてほしいときなんかは、好物をあげて様子をみたりするから」

「あ……はいっ……」

何気なくフォロワーされて、さらにまた少し、緊張が解けた。

(なんだか変な感じ……)

彼は沙良に、今までにないほどの緊張を強いてくる。けれど同時に、不思議な吸引力も發揮している。

普段こんなに長い間、男性と目を合わせたことなんかなのに、沙良はさつきからずっと彼と見つめ合っただけだ。いまだ自分からは目をそらせなくて、やたらと瞬きを繰り返す。

頬の火照りが首筋にまで下りるのを感じたとき、ようやく亮也の視線がリクちゃんに戻った。

リクちゃんは相変わらず口を開けたまま、身じろぎもしない。

「うーん、なるほど……。ちよっと疱疹ほうしんが出ているから、それが痛くてエサが食べられなくなって
いるんだろうな。症状からして、ヘルペスに間違いないかな」

カメとともに暮らすなかで、沙良も本を読んだりネットで調べたりして、ある程度の知識は得ている。ヘルペスは、重症化すると死に至る、カメにとつて恐ろしい病気だ。

リクちゃんにもしものことがあったらどうしよう――

沙良はにわかに不安を覚え、唇を強く噛んだ。ひざの上に置いた拳こぶしが小刻みに震える。

「大丈夫。まだ初期段階だし、じっくり治療すればちゃんと治るから安心していいよ」

沙良の表情に気づいたのか、亮也はにっこりと微笑んで沙良を見つめた。彼の自信たつぷりな表情に、沙良はほっとしてため息を漏らす。

「そうですか。よかった……」

沙良にとつてリクちゃんは、東京での暮らしを支えてくれた大切な相棒だ。だから健康には特に気をつけていたつもりだったのに……

「あの……原因はなんだったんでしょうか」

「ヘルペスの一般的な要因としては、ストレスや栄養不良などによる免疫力めんえきりょくの低下、温度低下による体温調整不良が考えられる。けど、リクちゃんはすぐ大切にされている子みただから、原因はそのほかにあるかもね。どんなに用心していても、散歩するときいろいろともらってきたりするし」

亮也の話し方やその内容は、思いやりに満ちている。彼の存在自体には戸惑うが、獣医師としての対応はまったくのストレスフリーだ。

イケメンである上に、診療は丁寧。対応にも非の打ちどころがない。

「経過観察をしたいから、明日から毎日通院してもらえるかな？ たぶん、二週間くらい。それ以降は、様子を見ながら決めるってことで。午前中は予約なしで診みられるけど、だいぶ混み合うと思う。中村さん、午後の予約状況はどう？」

亮也の問いに、中村が即答する。

「来週半ばまで予約がいっぱいですよ。時間外だと割高になるし、できれば昼間来たほうがいいと思うわ」

「そうか……。小向さんは学生かな？」

話しながら、亮也が立ち上がった。

「はい。でも、もう大学四年なので、じきにそうでなくなります」

動作の途中、またしても視線を捕とらえられた。

診察台をはさんで向かい合った彼の身長は、ゆうに一八十センチを超えている。対する沙良は、一五六センチ。

だいぶ顔を上に向けないと視線が合わない。

目の前の亮也に圧倒されつつ、なんとか頭をめぐらせる。

どう考えても、昼間の通院を二週間続けるのはつらい。

沙良は絶賛就活中の身だ。明日も面接の予定が入っているし、先の予定が不確定なこの状況で、通院の時間を捻出するのはかなり難しい。

「もし忙しいようなら、入院でもかまわないよ。そうすれば二十四時間体制で診てあげられるし」亮也が言い、中村が追従する。

「そうそう、先生はこの三階にお住まいだし、監視カメラもあるから、ほんと安心。うちは比較的入院料も安いし、もしなんだつたら分割払いもできるからね」

評判も雰囲気もいいし、獣医師やスタッフにも信頼が置ける。費用面に多少不安はあるけれど、ここなら安心してリクちゃんを任せられそうだ。

(でも、リクちゃんが入院だなんて……)

上京して以来、沙良は一日たりともリクちゃんと離れたことがなかった。実家にいたときでさえ別々に寝たのは修学旅行などのやむをえないときのみ。

今までずっと同じ部屋で暮らし、常にお互いの存在を感じながら生活してきたのだ。いくらこの病院が安心できるからといって、二週間も離れ離れになるなんて、正直言って耐えられそうもない。

しかし就職などで生活環境が変化する今、代理で通院を頼めるほど暇な友だちなどいない。

診察を終え、亮也の視線から解放されたリクちゃんが、のそのそ動きはじめた。診察台を横切り、手足をちょこちょこ動かして沙良のほうに近づいてくる。

首をもたげて沙良を見るつぶらな瞳。

懸命に歩く姿を見て、沙良はやはりリクちゃんと離れては暮らせないと再認識する。

(でも、どうしたらいい？ 困った……、すつこく困る……)

ただでさえ忙しいのに、さらにやるべきことができてしまった。しかも、それぞれが優先順位一位で、放り出せない重要なものときている。

それに、三月中に学生寮を出なければならぬのだ。本来ならもうとつくに出ていなければならぬところを、学校側の厚意でギリギリまでいさせてもらっている。

就職が決まらなくても、とにかくどこか別に住むところを見つけなければならぬことに変わりはしない。

それができないとなると、いよいよ実家に帰らなければならなくなる。せつかく都会に出て自分だけの力で生活をしていこうと決めたのに……

無意識のうちに、かなり深刻な顔をしていたのだろう。ふと気がつけば、沙良を見る二人の顔に、気遣わしそうな表情が浮かんでいた。

「なにか困ったことがあるみたいだけど、もしよかったら聞かせてもらってもいいかな？ 飼い主さんのメンタルをケアするのも獣医師の役割のひとつだ。場合によっては相談に乗れるかもしれないよ」

そばに寄ってきた中村も、沙良の背中に掌を添えた。

「そうそう。なにか事情があるなら話してみて」

気づけば沙良は、亮也にたずねられるままに現状を説明していた。

内定していた就職先が倒産したこと。二度目の就活が上手くいかない上に、あと十日もせずに住

むところがなくなること。リクちゃんは心の支えであり、できれば離れて暮らしたくないこと、など……

話したところでどうにもならないとわかってはいる。けれど、言葉にしたことでいくらか気持ちの整理ができたような気がした。

こうなったら、入院をお願いするしかないだろう。高くないと言ってくれたけど、長引けばそれなりの金額になる。金額次第では、実家に連絡することになるかもしれない。

まずは短い期間で借りられる、マンスリーマンションのようなところを考えるべきか。

やるべきことが次々に頭に思い浮かんだ。正直胃が痛くなりそうだったが、弱音なんか吐いていい暇はない。

(よし、頑張ろう！ 絶対に頑張り抜いてみせるからね、リクちゃん！)

沙良が気持ちも新たに診察台を見ると、リクちゃんがなにか訴えるように亮也のほうに片手を伸ばしていた。

亮也はリクちゃんの前にかがみ込み、差し伸べられた手を指先で摘んだ。そしてリクちゃんと、小さく握手をする。

リクちゃんを見つめていた亮也が、ゆっくりとひとつ頷いた。

「――よし、わかった。じゃあ、ここからは獣医師としての立場をいったん離れて……」

亮也が沙良の正面の椅子に座り直す。

「こういうのはどうかな？ リクちゃんは入院してうちが預かる。小向さん、あなたはここに引越してきて、就活をしながら住み込みのお手伝いさんをする。仕事は僕の生活全般にかかわること、それとクリニックの雑用や、その他もろもろ――。無論、無理のない範囲でかまわないし、労働に見合った給料も支払う。このところなにかと忙しくて、以前からそういった人がいてくれたらいいなとは思っていたんだ」

「は、はいっ!? 私が、お手伝いさんを？」

「そう。そうすれば双方の問題が一気に解決する。ちょうど三階のひと部屋が空いているし、そこにはお客用のベッドも置いてある。身一つで来てくれれば、すぐに生活ができるよ。どう？ 悪い話じゃないと思うけどな」

確かに悪くはない。

むしろありがたすぎて信じられないくらいだ。

しかし、目の前のイケメン獣医師と同居というのはどうだろう。いくら仕事とはいえ、男性と同じ屋根の下で寝起きすることになるのだ。

(それって傍^{そば}から見れば、同棲と同じじゃない？ いや、でも実際は違うけど……)

仮にそうするとして、両親にはなんて言おう？

期間限定のことだし、黙っていたほうが無駄に心配をかけなくてすむのでは……。だが、同じフロアというのはいかがなものか。しかし、これ以上いい解決方法があるとは思えない。

(だけども……。うーん、でも……)

あまりにも急展開すぎて、考えがまとまらない。

忙しく考えを巡らせる沙良の隣で、中村が言った。

「あら、いいじゃない？ 先生ったら、男の一人暮らしで普段ろくなものを食べてないのよ。コンビニのお弁当とか、外食とか……。忙しいのはわかりますけど、もうちょっと食べることに興味を持たなきゃいけませんよ。小向さん、料理は得意かしら？」

「あつ、はい。一応ひととおりのことはできますけど……」

「まあ！ じゃあ、ぜひともそうなさいよ。先生、これからしばらくの間は、まともなものが食べられますね」

中村が両手をポンと合わせた。まるで話は決まったと言わんばかりの口ぶり態度だ。

「あ、あの——」

「ほんと、よかつたわ。一石二鳥とは、まさにこのことよ。ねえ、先生？」

戸惑う沙良をよそに、亮也と中村が頷き合う。

まだ承諾するとはひと言も言っていないのに、いつの間にか勝手に話が決まっていた。

家事やクリニックの手伝いをすることは問題ない。

道徳的に考えると首を傾げたくもなるが、まあこんなイケメンが沙良に興味を示すことは考えられないから、自分さえ気にしなければそれも大丈夫か。単なる雇い主と、住み込みのお手伝いさんだ。

亮也と中村は、すでに日給の相場がいくらだのなんだのと話を進めている。

「——ってことで、一日一万円かどうか。もちろん光熱費や食費はこっち持ちで、なにかイレギュラーなことがあれば、その都度話し合って決めるってことで」

諸々の経費の負担なしで一日一万円なんて、願ってもない話ではないだろうか。

治療が終わるころには、その後の生活に必要な資金も貯まっているかもしれない。ここはもう割り切って考えたほうがいいだろう。そして、改めて就活を頑張るのだ。

「わかりました。やらせていただきます！」

覚悟を決めた沙良は、亮也のほうに向き直り頭を下げる。

「改めてどうぞよろしくお願ひします。あとで履歴書も提出させていただきますので」

「こちらこそ、よろしく」

亮也が右手を差し伸べる。あわてて同じように手を出すと、大きな掌にすっぽりと包み込まれた。ごつごつとしているけれど、すごく温かい手だ。

きつとこの手で触られる患者は、漏れなく亮也を信頼して身を任せる気になるのだろう。

「僕のほうの経歴は、クリニックのホームページに載っているよ。とりあえずリクちゃんのことを僕に任せて、小向さんは必要な準備をして。仕事はいつからはじめられそうかな？」

今夜からリクちゃんがここに入院するとなると、沙良も一緒にいたい。本格的な引越しはあとにして、ひとまず今日からここに住まわせてもらおう。

「今日から大丈夫です。一度寮に帰って、とりあえず必要なものを取ってきます。そのまま食材の買い出しをして、夕方にはここに戻ってこられると思います」

「そうか。じゃあ、気をつけて行っておいで。もし遅くなるようなら電話してくれたらいい」
亮也が沙良に向けてにっこりと笑った。その顔は、イケメンすぎて困るレベルだ。

沙良はかろうじて視線を合わせたまま、ぎこちなく微笑みを返す。

診察の合間を縫って、改めてスタツフとの顔合わせをすませた。

クリニックには女性スタツフが三人おり、それぞれが交代で受付と診察室を担当しているらしい。診察に立ち合っていた中村と、受付にいた大田おおたが今日の当番とのこと。もう一人のスタツフは小山やまという人で、三人とも動物看護師の資格を持っているという。

入院に関する必要な手続きを終え、沙良は急ぎ寮に向かう。

寮の前には、引越しのトラックが停まっていた。

すでに新しい学生が続々と入居してきており、沙良の部屋も空き次第、次の学生が入る予定だ。

（ほんと、思えばいい迷惑だね……。次の人のためにも、できるだけ早く引越しをすませちゃわないと）

迷ったあげく、実家にはリクちゃんの病気のことも含め、住み込みでお手伝いさんをする件は言わないでおくことに決めた。

住むところについては、当面友だちのアパートに居候いこうすることになったと連絡を入れる。

極力嘘はつきたくなかったけれど、今はこれがベストな選択だと自分に言い聞かせた。

差しあたって必要なものだけをリュックサックに詰め込み、ふたたびクリニックを目指し電車に乗る。駅前のスーパーで食材を買い込み、急ぎ足で歩いた。

クリニックの診療時間はすでに終わっており、入り口には「CLOSED」のプレートがかかけられている。
ドアを開けてなかに入ると、中村たちが帰る準備をしていた。

「あら、おかえりなさい。リクちゃん、さつき流動食を食べたところよ」

大田が、リクちゃんの居場所を指で示して教えてくれた。

教えられたのは、「B」の部屋だ。あたりに亮也の姿はない。

「あの、数原先生は……」

「先生は近所の患畜かんちくさんのお宅まで往診中よ。今しがた連絡があつて、もうじき帰るって」

看護服を脱いだ二人は、どこにでもいる近所のおばちゃんの格好をしている。

「はい、これも渡しておくわね」

大田が手渡してくれたクリアフォルダには、クリニックのスケジュールや看護師らのシフト表が入っていた。

それによると、クリニックは午前中は九時から十二時まで。午後は二時から六時までで、この時間帯は予約診療になる。土曜日は午前中の予約診療のみ。日曜日は休診日。その他往診や急患にも臨機応変りんきおうへんに対応するそうだ。

「私を含め、ここにいる看護師は全員が五十過ぎで既婚者なの。だってほら、数原先生ってあのと
おりのイケメンでしょう？ まだ独身だし、ここで長く働くには私たちくらいのおばちゃんがちよ
うどいいのよ。ね、中村さん？」

「そうなのよ。そうでないと、飼い主さんたちの視線が怖い怖い」

中村が言うには、午前中の診療はそれほどでもないが、午後は亮也目当ての飼い主が頻繁に予約を入れて来院すること。彼女たちは早めに待合室に来ては互いに牽制し合い、亮也をめぐって火花を散らしているそうだと。

なるほど。

沙良は、昼間見た女性飼い主たちのことを思い出した。

彼女たちがここに来る目的は、ペットの治療だけではなかったのだ。むしろ、亮也に会うことがメインなのかもしれない。

「だから、そのことに関しては、ちよつと心配なの。もしかして、飼い主さんたちが沙良ちゃんのことをライバル認定しちゃうんじゃないかって」

大田が心配そうに眉根を寄せると、中村も頷いて深刻そうな表情を浮かべる。

「うちのクリニックは、先生自身が広告塔だからね。予約診療はほぼ全員が先生目当てに通ってくる人。皆さん火花バチバチで大変なのよ」

聞くとところによると、かつては若い看護師も採用していたようだが、スタッフ間でもトラブルが相次ぎ大変だったらしい。原因は言わずと知れた、亮也をめぐる恋愛バトルだ。

結果、クリニックの実質的な採用基準は、五十歳以上の既婚者になったという。

「はあ……、そうですか……」

なんとなく予想はついていたけれど、そこまでひどいとは思わなかった。

そういうことなら、極力飼い主の神経を逆なでしない、地味な裏方に徹しなければ。

沙良が自然と身を縮こめていると、中村が自分の胸を掌で叩いて、にっこりと笑う。

「平気よ。もしなにかあっても私たちが支えるからね。他のことでも、いろいろと相談に乗ってあげるし」

その頼もしげな様子に、沙良はほつとして口元をほころばせた。

「はい！ ありがとうございます」

「ちなみにうちの先生の診療対象って、オールマイティなのよ。家庭にいるペットはもちろん、動物園にいる猛獣や水族館にいる魚だって診れちゃう。もちろん牛や馬だってどんと来いよ」

中村が歌うように説明する。

「牛や馬まで……」

沙良は、実家にいる動物たちのことを思い出した。

実家の牧場には、牛が十五頭と馬が五頭のほか、ヤギやニワトリがいる。

もともと牧場にはかかりつけの獣医師がいたが、沙良が大学に進学してまもなく、病気で亡くなってしまう。今は新しく別の動物病院の世話になっていて、沙良はその先生とはまったく面識がない。

「そう。なかにはすぐく暴れん坊の患者もいるんだけど、先生に睨まれると漏れなくおとなしくなっちゃうから不思議なのよね」

大田が大げさに首を傾げる。それに合わせるように、中村が何度も首を縦に振った。

「そうそう、あの目に見つめられて、逃げ出せた患畜は今まで一匹たりともいないんだから。小向さんも見たでしょう？ ああの調子で、動物も人間もロックオンしちゃうのよ。すごいわ。さすがに私たちは慣れちゃってるけどね」

大田たちは顔を見合わせて、笑い声を上げる。

「目力もそうだけど、先生って、動物にも人間にも優しいのよ。それが動物にも伝わるんじゃないのかしらね。この人になら任せられる、って感じで」

「私もそう思うわ。ここが流行っているのは、まずそれよね。実際腕もいいし、どんな患畜でも受け入れて助けようとしてくれるの。ほんと、あんないい先生ってなかなかいいわよね」

「そうそう、うちは西亜大学の獣医学部と提携しているか、交流があつてね。輸血用の血液の調達もそこできているし、大掛かりな手術とかあると、大学の施設を使わせてもらったりしてるの。先生の留守中に重症の患畜さんが出たときも、応援にきてもらったりとか。——あら、もうこんな時間だわ！」

時計を見ると、もう午後七時半をすぎている。

ひとしきり沙良に病院のことを説明した二人は、機嫌よく帰っていった。

沙良は彼女らを見送ったあと、改めて病院内を見回す。これからしばらくは、この建物が沙良の職場であり、住まいになるのだ。

「でも、よかった。先生もスタッフも皆いい人で……。ビビりで人見知りの私でも、すんなり受け入れてもらえたし」

親子ほど年が離れているせいもあつてか、二人ともすでに沙良のことを「沙良ちゃん」と呼んでくれている。まるで、実家の近所のおばちゃんたちと話しているみたいだ。

内定がなくなつてからずっと気持ちに余裕がなかったが、今はずいぶん楽な気持ちだ。

依然就活中だけど、少なくとも一歩前に歩き出せたという事実が沙良の心を軽くしているのだらう。

「やるからには、精一杯がんばろう」

気持ち新たに、背筋をしゃんと伸ばした。

屋間ざつと案内してもらつたから、屋内にあるおおよその部屋の位置はわかつている。

待合室をすぎて右手にある入院室に向かう。

室内は、壁に沿って個室が用意されており、左右で大型動物用と小動物用に分けられている。

リクちゃんは左手上段の個室にケージごと入れられており、両隣には裂傷治療中のフェレットと、中耳炎のチワワがいた。

そつと近づいてみると、皆ちようど眠っている。

沙良はしばらくの間リクちゃんの寝顔に見入つたあと、部屋を出て階段で三階に向かった。

背中には私物が入つたリュックを背負い、両手に食料品が入つたレジ袋を下げている。

聞かされた話では、建物の二階部分は患畜用の集中治療室——ICU専用のスペースになっているらしい。

屋内の階段と三階フロア全体の照明はセンサー式で、自動的に点灯するようだ。

「ほんと助かる。こっつてやたら広いんだもの。三階は患畜かんせきもないし、一人だとなんだか怖いもんね」

二階の踊り場をとりすぎ、三階に到着する。

実のところ、沙良は暗いところが得意ではない。得意でないというか、はつきりと苦手だ。正直言って、怖いのだ。

暗がりからなにかがふいに出てきそうで、どうしてもビクついてしまう。

「なんだか寮生活をはじめたときのことを思い出すなあ……」

長年住んでいた実家なら慣れているし、家族がいるから割と平気だった。しかし、寮の慣れないワンルームでは、暗闇に対する苦手意識が前面に出てしまつて最初は大変だったのだ。

リクちゃんが部屋で待つていてくれたから乗り切れたと言つても、過言ではない。

「大丈夫。同じ屋根の下にリクちゃんがいるんだもの。怖くない怖くない。もうじき数原先生も帰つてくるし、ぜんぜん平気だつて」

気持ちを切り替え、住居部分のドアを開けた。

広々とした玄関を通り抜けて、左手にあるキッチンに向かう。

実家にいたころから料理をしていた沙良にとつて、食事作りはまったく苦にならない。寮には、自由に使えるキッチンがあり、沙良はよくそこで自分の食事を作つていた。

亮也は特に食べ物の好き嫌いや、住まいに関するこだわりはないらしい。家事に関することは全面的に任せると、さっきの時点で沙良に宣言していた。

3LDKのフロア全体は階下と同じ白壁で、床面も白木のフローリングだ。全体の広さはおよそ八十平米といったところだろうか。

キッチンは、カウンターを挟んでリビングルームとダイニングルームに繋がつながっている。

「広い！ それに、なんだか、すつごくおしゃれ」

家具はモノトーンで統一され、リビングにはどっしりとしたカウチ型のソファが置かれている。

「それにしても、綺麗な部屋。まるで散らかつてないんだ……」

男性の一人暮らしというから、多少雑然ざつぜんとしているものと思つていた。けれど、ここは全体的に片づいているというか、そもそもあまり物が無い。

本や洋服のたぐいは、壁と一体型の収納スペースのなかだと聞いている。掃除するのは便利そうだが、生活感がまったく感じられない部屋だった。

食料品をキッチンに置き、ひととおり片づけをすませる。

「あ、そうだ。ちよつとだけホームページを見てみようかな」

これからはじまる同居生活を前に、雇い主に関することは事前に知つておいたほうがいだろう。沙良は荷物からノートパソコンを取り出し、クリニククのサイトにアクセスした。

「院長プロフィール」のページを開くと、亮也本人の写真の代わりに、かなりデフォルメされたタヌキのイラストが貼られていた。

「ふっ……なんでタヌキ？ 載せるなら、イケメンのライオンじゃないの？」
あれほどの美男だ。自慢げに顔写真を載せてもいいくらいなのに、タヌキでは実物の亮也とあま

りにも違いすぎる。

「イケメンすぎて、かえって載せにくいとか？ イケメンはイケメンなりに気を使って大変なのかなあ」

一人きりでいる不安もあり、沙良は小さくひとり言を言いながら閲覧を続ける。

タヌキの下には、簡単な経歴が書かれていた。

亮也は国内最高峰の大学で獣医学を学び、その後北海道の動物病院に勤務、そして二年前に現在のクリニックを開業したようだ。動物全般診療可能で、特にエキゾチックアニマルを得意とする、とある。

「年齢は、今年で二十九歳か」

そう呟いたタイミングで、リュックサックに入れていたスマートフォンの着信音が鳴った。あわてて取り出して画面を確認すると、さっき登録したばかりの亮也の番号が表示されている。

「はいっ、小向です！」

すぐに応答した方がいいが、緊張のせいで声が変に上ずってしまった。

『ああ、数原です。今帰りなんですけど、必要なものがあれば買って帰るよ。なにかあるかな？』
亮也の快活な声が返ってくる。

普段父より若い男性と電話で話すことなどない沙良は、それだけでもビビってしまう。

「い、いいえっ。帰りに買い物してきたので、特になにもありません」

目の前にいるわけでもないのに、つい頭と手を振ってしまう。

『そうか。じゃ、あと三十分くらいで帰るから、留守番よろしく』

通話が切れ、部屋のなかに静寂が戻る。スマートフォンを当てていた耳が、やけに熱く感じた。

ふと気がつけば、耳だけではなく頬もジンジンと火照っている。

『あと三十分くらいで帰るから、留守番よろしく』……だつて。今の、なんだか新婚さんの会話みたいじゃない？」

呟くと同時に、意味もなくにやついている自分に気づき、一人あわてふためく。

「や……ちよ、ちよっと。なに考えてるのよ、私ったら！」

無意識だったけれど、さっき一瞬だけ自分と亮也が新婚夫婦だったら——、なんてことを想像していた。

ただいまとおかえりなさいのあとに、晩ごはんのメニューについて微笑みながら会話する、自分と亮也を——

「な、ないって！ 間違っても、ないから！ あんなイケメンと私がかつつくわけないでしょ？」

沙良は左右に頭を振って、的外れな発想を吹き飛ばした。

いくらなんでも、考えが飛躍しすぎている。

沙良がこうして住み込みのお手伝いさんになったのは、二人の利害関係が一致したからであり、沙良の現状を気の毒に思ってくれた亮也が親切心で提案してくれたおかげだ。

間違っても恋のはじまりなんかではない。そのことをしっかりと自覚しておかなくては、とんでもない勘違い女になってしまうのではないか。

けれど、なぜか胸の鼓動は一向に静まる気配がなかった。

「さ、早く晩ごはんの用意しなくちゃ」

なんとか意識を切りかえ、沙良は持参したエプロンをつけて食事の準備に取りかかった。

亮也に聞かされていたとおり、冷蔵庫にはアルコールとミネラルウォーターくらいしか入っていない。調理道具は一式そろっているけれど、調味料の買い置きはなかった。

家でまったく料理をしないというのは、どうやら本当のようだ。

鍋やフライパンも、使われた形跡がまったくない。壁にかかっているおたまを見ると、店頭で売られていたときのシールが貼られたままになっていた。

「彼女とかいないのかな……」

あれほどの容姿である上に、人当たりもよく優しい。彼女がいて当然だし、むしろいないほうがおかしいと思う。

けれど、改めて周りを見回しても、生活感のみならず、女性の影もない。

シンク横の引き出しを開けると、コンビニでもらったと思われる割り箸が山積みになっていた。

「逆に何人も彼女がいるから、それぞれの存在がバレないようにキッチンとか使わせていないのかも。もしくはもともと恋人は家に入れない主義だったりして？ イケメン獣医師の恋愛事情って、案外そんな感じなのかな」

恋人は一人か、もしくは複数いる。だけど、いずれにせよ仕事場がある自宅建物には立ち入らせない。そんな自分ルールが存在するのかもしれない。

そうであると仮定すると、いろいろと納得がいく。

「うん、だとしたらやつぱり私は論外だね。……って、最初からそう言ってるじゃない！」

自分に突っ込みを入れたところで、頭を切り替えて本格的に料理に取りかかった。

ステンレス製の調理台は、傷ひとつなく綺麗だ。しかし、沙良にはやや高くて使いづらい。

明日踏み台を買ってきて高さ調整をしよう。そんなことを思いながら炊飯器のスイッチを入れ、調理器具の準備をする。

高さを除けば、広くてとても使いやすいキッチンだ。これなら快適にすごせそうだし、調理もはかどるだろう。

時間があまりないから、夕食のメインメニューは豚肉が多めの野菜炒めに決めた。それにほうれん草の胡麻和えと、具沢山の味噌汁をつける。

すべてを同時進行で作りながら、器はどれにしようかと棚のなかを物色する。こちらも亮也の身長に合わせているのか、かなり高い位置までものが置けるようになっていた。

「うわ、これじゃあ踏み台があっても、上のほうまでは届かないなあ」

それにしても、どれをとつてもおしゃれな食器ばかりだ。沙良の実家にあるようなキャラクターもののマグカップや、景品でもらったような皿などはいっさい見当たらない。

つま先立ちして苦労しながら食器を取り出していると、玄関のチャイムが鳴った。

「は……はーいー！」

たぶん亮也だ。

だけど、もしかしたら急病の患者かんちくかもしれない。

火を消してキッチンを出た沙良は、急いで階段に向かった。慣れない段差を駆け下り、二階の踊り場に到着する。そのままの勢いで一階を目指して、最後の段差を下りきる前にちょっとだけ脚が滑すべった。

「ひゃっ！」

バランスを崩し前面の壁にぶつかりそうになったそのとき、フロアから伸びてきた腕に助けられた。

「おっと危ない」

腕に抱えられた状態のまま上を向くと、驚いた顔の亮也がこちらを見つめていた。

「ただいま。出迎えはありがたいけど、そんなに急ぐと怪我けがをするぞ」

昼間聞いたときと同じ、優しく低い声だ。けれど間近で聞くせいか、やけにセクシーに聞こえる。

「おつ……おかえりなさい……」

ようやく出た声は、情けないほど小さかった。

至近距離で見つめ合ううち、頬がどんどん紅潮していく。

「足、捻ひねったんじゃないか？ 念のためこのまま運ぶから楽にしてて」

「えっ？ わ、わわっ……！」

身体がふわりと宙に浮いたかと思うと、太ももをしっかりと抱えられて縦抱きにされる。

やや癖のある茶褐色の髪が、沙良の目の前に迫った。どんなシャンプーを使っているのだろう、すごくいい香りが漂たなってくる。

びっくりして、かろうじて彼の肩に両手を置いたものの、そのあとはどうしたらいいのかかわからない。

「あ……あのっ……」

ようやく口を開いたのに、そのあとが出てこない。トントんと軽快に階段を上るリズムが、沙良の身体を上下に揺らす。

沙良の体重は五五キロで、自分でも少し余分な肉がついていることを自覚していた。普段それを感じするようなことはないけれど、今は意識しないわけにはいかなかった。ちよつとでも小さくならうと、身体をぎゅつと縮こめて丸くなる。

「そんなに丸まらなくても大丈夫だよ。すぐに着くから、楽にしてて」

亮也が上を向いて口元をほころばせる。その笑顔が素敵すぎて、沙良はまたしても彼から目が離せなくなった。

心臓が、口から飛び出そうだ。どうにか落ち着こうとするのに、エラ呼吸する金魚のように、やたらと口ばかりパクパクと動いてしまう。

二階の踊り場に着くと、亮也が立ち止まって沙良を見た。視線が合い、思わず大きく目を見開く。「ふむ……すごく驚いた顔しているね。目がまん丸になっているけど、瞳孔どうこうは閉じ気味だな。もし

かして緊張してるのかな？ 大丈夫、ぜんぜん怖くないから安心していいよ」

37 野獣な獣医

亮也がふたたび階段を上りはじめる。

視線が外れ、沙良はちよつとだけ身体のを抜いた。

やはりこの人は、自分のことを女性だなんて微塵も思っていない。話しかけてくる口ぶりが、まるで患畜を相手にしているみたいだ。もしくは、子供相手？

きつと彼にとつての沙良は、女を意識しないですむ、理想のお手伝いさんなのだろう。そうとわかれば、おとなしく運ばれるのが一番の対処法だ。

でも……この距離は近い！

いくらなんでも近すぎだ。

順調に階段を運ばれ、気がついたときには三階のリビングに着いていた。

ソファの上に沙良を下ろした亮也が、足元に片膝をつく。あわてて立ち上がるうとしたが、彼が大きな掌で左足首を持ち、顔を覗き込んでくるのでそれもかなわない。

「まだじつとしてて。……どう、痛くないかな？」

亮也が、沙良の足首を上下にそつと動かす。

「はい」

痛くはない。だけど、ものすごく緊張している。男性が沙良の足首に触れるなんて、生まれてはじめての経験だ。

「こつちも？」

今度は左右に動かしてくる。

「はいっ、大丈夫です」

それにしても、イケメンは、頭のとっぺんですらかっこいい。きつと真のイケメンとは、全方位から見て非の打ちどころのない、亮也のような男性のことを言うのだろう。

「そうか。じゃあよかった」

亮也は顔を上げ、沙良を見て目を細めた。

きつと顔が赤くなっていると思うけれど、ここは我慢して、視線を合わせたままにしておく。

「もし後々痛むようであればすぐに言つて。無理して動かすとよくないからね」

「はい、ありがとうございます」

沙良の足首を離すと、亮也がおもむろに沙良の隣に腰を下ろし、大きく背伸びをした。

「うーん！ 今日も一日、頑張ったなあ！」

突然の大声に、ちよつとだけびっくりする。

「ああ、帰りに買い物を買わせてくれたんだよね。ごめん、うっかりしていた。必要経費として、いくらか事前に渡しておくべきだった」

「いえ、少額だったし大丈夫です」

「学生時代はずつと自炊？ あ、でも寮に入っていたつて言つてたよね」

「はい。でも、食事は各自作つて食べてたので」

オフモードに入ったのか、亮也はソファの背もたれに頭を寄せ、目を閉じている。呼吸もゆっくりとしており、もしかしてこのまま寝てしまうのではないかと思うくらいだ。

前に投げ出された彼の脚は、驚くほど長い。

そのまま様子を窺っていると、閉じていた目が開き、沙良のほうに視線が向いた。

「俺、クリニクで気を張っている分、家では結構だらけてるんだ。だから、いつもこんな感じ。適当に食べて風呂に入って、あとは寝るだけ。あまり手はかからないタイプだから、その点では安心してくれていいと思うよ」

言われてみれば、なるほど昼間見たときよりも表情が緩んでいる感じだ。

クリニクでの彼も割とリラックスした感じに見えたけれど、そうではなかったらしい。

それも当然か。やってくるさまざまな患者を前に、頭のなかはフル回転だったはずだ。それプラス往診までしたのだから、疲れていて当たり前だろう。

それなのに、亮也はさつきから沙良に気を使っているような気がする。

やたらと質問したり答えを引き出そうとしたりはしないし、質問も短い返事ですむものばかりだ。だから沙良は、変に気負わなくてすんでいる。

思えば、今までに出会った同じ年頃の男性で、こんな感じの人はいなかったように思う。たいてい皆自分のペースで話をして、質問があればほとんど投げかけ、なんらかの答えを聞き出そうとする。

だけど、亮也はまるで違う。

全体的な雰囲気がとてもゆったりとしていて、圧迫感がない。

これが大人の男というものなのだろうか。

イケメンすぎてドキドキするのに、なぜか不思議なくらい安心するのは、そういった気配があるからかもしれない。

だけど、正直今の状況をどうやりすごせばいいのかわからない。

「ははっ、そんな萎縮したハムスターみたいにならなくていいよ。おなかいっぱい息を吸って、吐いて……そうそう、リラックスして。ここはもう、小向さんの職場であり、家でもあるんだから」

どうやら、自然と身体が縮こまり、息を潜めていたみたいだ。

言われるままに深呼吸をしていると、大きな掌で頭をなでられた。

亮也の微笑んだ顔につられて、沙良も笑みを浮かべる。

無理に笑ったのではない。笑ってしまうほど魅力的な笑顔を見てしまったせいだ。

「よかった、やっと笑ってくれたね。はじめて見たときに思ったんだけど、小向さんって小動物系だよ。でも目が大きいから、ハムスターじゃないな。ふわふわしてて、こう……手のなかでくると丸くなっちゃいそうな——」

言いながら思案顔をしていた亮也だったが、はたとなにかに気づいたといったふうに、片方の眉尻を上げる。

「うん、やっぱりそうだ。小向さん、エゾモモンガに似てるよ」

亮也が確信を持った声でそう言い切る。

一方の沙良はわけがわからず、余計目を大きく見開いて首を捻った。

「えっ？ エ、エゾ……？」

「そうそう、それ！ そのしぐさも似ているよ。知らない？ エゾモモンガ。ものすごく可愛いやつ……。ほら、これだ」

亮也が取り出したスマートフォンを操作して、沙良のほうに差し出す。示されたスマートフォン画面には、松の木のうろから身を乗り出す、小動物の写真が表示されていた。大きな黒い目に小さな口。体毛は白と褐色で、びっくりするほど可愛らしい。

「な？ そっくりだと思わないか？ こいつはネズミ目リス科で、体長はだいたい十五センチから十八センチくらい、体重は平均して百グラムほど。北海道の森林に住んでいるんだ。昔、北海道のクリニックにいたときに怪我をした子が連れてこられてね。たまたま居合わせたのが、当時まだ新米獣医師だった俺だけでさ。その子が、俺が正式に担当した患畜かんじく第一号になってくれた」

スマートフォン画面が遠のき、亮也の顔がぐっと近づいてくる。

彼の目がごく近い位置に迫った。もう少し近寄れば、鼻先がぐつついてしまいうさだ。「だけど、残念ながらペットとして飼うことは法律で禁じられている。だから、治療がすんだ時点で森に帰したんだけどね。野生だと寿命はあまり長くないんだけど、まだ元気に飛び回ってくれているといいな」

エゾモモンガのことを話しながらも、亮也の視線はずっと沙良の顔に注がれている。

「目は大きいと九ミリくらいあってね。丸くて食べてしまいたいくらい愛らしかったなあ……。そういうところも、すごく似てる」

(えっ？ 食べっ……)

それはもしかして、沙良を食べてしまいたいということだろうか？

いや、いくらなんでもそれはない。動物と人間を一緒にしてどうする。

「それはさておき、小向さんの呼び方だけ……。もし嫌じゃなかったら、下の名前でもいいかな？ 中村さんたちもそうしているみたいだし、そのほうが親しみがこもってる感じがするしね。もちろん、仕事中は別だけど。どうかな？」

「あ……はい！ 問題ありません」

私生活でもそのほうが呼ばれ慣れているし、むしろ「小向さん」なんて呼ばれると、こちらが身構えてしまいそうだ。

「よかった。じゃあ、そうさせてもらうよ。俺のことも好きに呼んでくれていいから」

「はい、わかりました」

そうは言っても、同じように下の名前を呼ぶわけにもいかない。やはりはじめは「数原先生」が妥当なところだろう。

「さて、と。さっきからすごくいい匂いがしてるな。今夜のメニューは……中華系？」

「はい、お肉たっぷり野菜炒めがメインディッシュです」

「おっ、いいね！ じゃあ、さっそくごはんにしてもらっていいかな？」

「はい」

ああ、これだ。

亮也の食べる気満々の顔を見て、沙良は顔をほころばせた。

寮でもそうだったけれど、一人ぶんをチマチマと作って食べるのは今ひとつ寂しい。誰か一緒に食べてくれる人がいれば楽しいし、作り甲斐もあるというものだ。

ただし今回の場合、相手は気心の知れた友だちではなく、今日会ったばかりの独身男性。作ったものを食べてくれるのは嬉しいけれど、身内以外の男性に手料理を振舞うのははじめてのことで、緊張する。

沙良の気後れをよそに、亮也は早々にキッチンに向かった。

「うお！ すつごくうまそう。あ、食器とかわかったかな？」

「はい、手が届く範囲のものを適当に……」

急いであとを追ってキッチンに入ると、亮也ができた料理に見入っている。

「そうか、このキッチン、少し身長が高い人用に作ってあるから、高さ調整する踏み台とかいるよな。明日時間があれば、一緒に買いに行こうか」

くるりと振り向かれ、思わずその場に踏みとどまる。イケメンと近づくにはまだ勇気が足りない。「い、いえ、明日は午前中に面接があつて……。そのまま寮に行つて引越しをすませるつもりなので、その途中で適当に買ってきます」

「うん、わかった。じゃあ、それも必要経費分から出してくれていいから」

亮也は率先して、配膳を手伝ってくれる。

沙良はキッチンとテーブルを行ったり来たりしながら、つい今しがたの発言について考えを巡らせた。

(やつぱり一緒に行つたほうがよかつたかな……。必要経費だし……。でも緊張して、選ぶどころじゃなくなるかも。あ、百均とかじゃダメなのか)

見たところ、部屋のなかに置かれているものはすべて、それなりに値が張りそうなものばかりだ。踏み台なんて役に立ちさえすればなんでもいいと思つていたけれど、この家に置く以上、それではダメかもしれない。デザイン重視で選んだほうがいいのだろうか。

「どうかした？ 難しい顔して」

「あ……いえ……」

亮也は湯気が立つ皿が並ぶテーブルの前に座り、沙良にも座るよう促す。

「いきなりこんな生活がはじまつて戸惑うことだらけだろう？ ましてや相手が男なんだから、正直いろいろいると気を使うと思う。だけど、あまり気負わなくていいし、なにか気になることがあれば気軽に聞いてくれたらいいよ」

優しく促され、沙良はようやく思つていたことを口に出した。

「あ……えっと、私が買ってきたものがこの部屋にマッチしなかつたらどうしようって……」

「踏み台のことを言ってるのかな？」

「はい……、色とかデザインとか……」

せっかきとコーディネートされているのに、そこだけが残念な感じになるのは申し訳ないけれど、亮也は軽く微笑んだまま首を横に振った。

「ここって、設計の段階から全部友だちのインテリアデザイナーに任せっきりで建ててもらったん

だ。だからインテリアも、全部丸投げ。気に入ってはいるけど特別なこだわりがあるわけじゃないから。そういうわけで、沙良ちゃんが気に入ったなら、なんでもいいよ。使い勝手がいいのが一番だし、その辺は実際に使う人の選択に任せる」

「はい——」

顔いて返事をした方がいいが、実際に「沙良ちゃん」と呼ばれたことで顔が火照る。

「じゃ、じゃあ、適当にみつろつて買ってきます」

「うん、よろしく」

向かい合って座り夕食を食べる間も、緊張状態は続いた。

箸を持つ指先は強張るし、咀嚼して呑み込む音すら気になってしまふ。

「うん、うまい！ この野菜炒め、すごくうまいよ」

一方亮也はというと、子供のような声を上げていた。沙良は嬉しく思いつつも、これまでにない褒められように、顔を赤くして恐縮してしまふ。

「家で炊き立てのごはんを食べるのって、いつぶりかな……。家電を買い揃えたときに何度か炊いて、それきりだったから、かれこれ二年近くなるのか」

「えっ、そんなに長い間、炊き立てのごはんなしで!？」

驚いて、つい箸を持ったまま身を乗り出してしまった。

一日や二日食べなくてもどうということはないけれど、二年も食べていないなんて、沙良には考えられないことだ。

「うん。食べたくなったら行きつけの店に行つてたから。忙しくてなかなか足を運べないんだけどね」

「ああ……。そうですね。炊き立てのごはんとか、外でも食べられますもんね」

そっと座り直す沙良に、亮也がにっこりと笑った。

「でも、やっぱりこうして家でゆっくり食べるのが一番だな。今はじめてそう思った。自分で炊いたときは、おかずは全部できあいのもばかりだったから」

そのあとも亮也は、見ていて気持ちがいいほどの食べっぷりを見せてくれた。

昼間あれだけ忙しく動き回っているのだから、おなかがすいて当然だろう。

彼は、ごはんを二杯おかわりし、用意した料理を全部綺麗に平らげてから「ごちそうさま」と言った。

沙良はといえば、そんな亮也につられるようにして食べたせいか、気がつけばいつもの半分の間で食べ終わっていた。

「お皿、持っていくよ」

「いいえ、私がやります。だって、お給料をもらうわけだし……」

片づけを手伝おうとして立ち上がる亮也を、あわてて押しとどめる。

「それはそうだけど、これくらいは、ね。お手伝いといっても就活優先が大前提だし、明日だって午前中に面接の予定が入ってるんでしょ？」

「あ……はい」

「その準備もあるだろうし、俺が運んで、沙良ちゃんはそれを食洗機に突っ込む。あとは自由時間でいいよ。俺はこのあとシャワー浴びて寝るだけだし」

「はい。ありがとうございます」

トレイに食器を載せ終わると、亮也は大またでキッチンへ歩いていく。それにしても、ものすごく好条件で雇われたものだ。

今さらながら恐縮して、亮也とすれ違いざまにぺこりと頭を下げる。すると、突然後頭部を撫でられた。驚いて顔を上げた視線が亮也のものどぶつかる。

「ごころうさま。じゃあ、また明日ね。おやすみ」

歩きながら見つめられ、まるで流し目を送られた気分になる。ドキドキしつつもう一度会釈し、その場に立ち尽くした。

ほんの一瞬のことだったのに、触れられた部分にまだ亮也の手のぬくもりが残っている。

「……お皿……洗わないと……」

ようやく動けるようになった沙良はふらふらとキッチンに向かい、シンクの前に立った。軽く皿を水洗いして、食洗機のなかに並べる。

バスルームでは、今ごろ亮也が服を脱いでシャワーを浴びているころだろう。

「……って、余計なこと考えなくていいってば！」

頭のなかに浴室の湯気が思い浮かびそうになり、沙良は急いで妄想を蹴散らす。

男性と同居するという実感が、今になってじわじわと湧き起こる。

今流行のルームシェアだと思えばいい？

だけど、相手はモデルか俳優クラスのイケメンなわけで――

早々に後片づけを終えると、あてがわれた自室に入った。亮也のベッドルームの隣で、ベッドのほかに、丸いテーブルと椅子が置かれている。沙良はそこに、持参したノートパソコンを設置した。

壁の一面はクローゼットになっていて、沙良の少ない荷物を入れてある。

窓の外はベランダで、その向こうはクリニクの駐車場だ。

沙良はベランダに出て、しばらくの間ぼんやりと外を眺めた。

クリニクは大通りに面しているが、裏は住宅地だ。目前に見える家屋は、皆二階建てばかり。

そのため、視界は割と開けていた。

「はあ……。今日は、いろいろありすぎたなあ。だって考えてもみてよ。朝起きたときは、まさかこうなるとは思ってもみなかったんだから」

改めて、今日一日に起きた出来事を振り返ってみる。怒涛の展開とは、まさにこのことを言うのだろう。

「でも、とりあえず当面の危機は乗り越えたって感じかな……。さ、私もそろそろ寝る準備しなきゃ」

ひとり言を言いながら部屋に戻り、バスルームに向かうべく部屋のドアを開けた。すると、ちょうど亮也が通りすぎるところだった。

「あ、よかった。時間があるときに白衣をクリニングに出すか、洗ってアイロンをかけておいて

くれる?」
まさかタイミングよく、彼がいるとは。沙良は、もう少しで叫びそうになる口をなんとか押さえる。

亮也は、上半身になにも着ていなかった。下半身は白いバスタオルに包まれてはいるが、きつとその下は裸だ。

あわてて顔を上向け、亮也と視線を合わせる。
たった今シャワーを終えたばかりなのか、髪の毛にまだ少し水滴が残っていた。

「は……はいっ……」
別に動揺なんかしていない――

そう自分に言い聞かせなければ、今の状況に耐えられそうもなかった。

沙良を見る亮也の目が、さっきとは違った色に見える。ちょっとだけ赤みがかかった琥珀色こはくみたいな、なんとも言えない魅惑的な色合いだ。

「予備があるから、あさつてまでいいよ」

石鹸せっけんのいい香りが漂たなってきて、沙良は思わず鼻をひくつかせた。

一日の終わりに見るには刺激的すぎる光景に、脳味噌がパニックを起こしている。

「わっ、わかりました! おやすみなさいっ」

一歩下がり、ドアを閉めた。

(え? ええっ? 今の、なに……?)

たった今見た亮也の姿が、目の裏に焼きついている。

右隣の部屋のドアが閉まる音が聞こえてきた。

同居一日目にして、前途多難――

だけど、いちいち驚いてばかりもいられない。

その場に立ち尽くしていた沙良は、深呼吸を繰り返し、そして音を立てないようにそっとバスルームに向かったのだった。

* * *

その次の日。

沙良は目覚まし時計が鳴る二時間も前に目を覚ました。

カーテン越しにうつすらと明け方の光が見える。

昨夜はあれからシャワーを浴びて、早々にベッドに入った。しかしながら、なかなか寝付けずに、かなりの時間を考えごとに費やしていた。なのに、こんなに早く起きるなんて……

「なんで目が覚めちゃったんだろう。いくらなんでも、まだ起きるには早すぎるよ……」

沙良はもう一度目を閉じて、布団のなかで丸くなる。

用意されたベッドはちょうどいい硬さで、寝心地は最高だった。

紺色のシーツ類はすべて同じ素材のもので統一され、びっくりするほど肌触りがいい。きつとこ